

直弼 / 象山 / 忠震(2)

競争する記念碑

阿 部 安 成

- I はじめに 問題の所在
- II 銅像を説く，像主を語る
- III 銅像の時代
- IV 開港に直接尽瘁せしものたち（以上，本誌第370号）
- V 横浜開港の先覚者（以下，本号）
- VI 横浜開港之首唱者
- VII 履歴の競争（以下，本誌2008年発行号掲載予定）
- VIII おわりに

V 横浜開港の先覚者

（1）開国百年の佐久間象山

ペリー来航と日米和親条約（神奈川条約）締結から100年をかぞえたという1954年の横浜では，開催期間を4月5日（太陽暦での条約調印日）から6月2日（太陰太陽暦での横浜開港日）までとした，開国百年記念の祭典が催された。この祝賀行事閉幕後の10月1日付で，横浜の野毛山公園に，「横浜開港の先覚者佐久間象山の碑」が建立された。佐久間象山顕彰会が建てたこの碑への揮毫は，横浜市長平沼亮三がおこなった。碑文はつぎのとおりであ



る。

安政元年一八五四年米国の使節ペリーが来朝のおり 松代藩軍議役として横浜村にいた佐久間象山先生は 当時の新思想家でありまた熱心な開国論者であつた 先生は日本が世界の先進国からとり残されることを憂え幕府の要路に対してしばしば欧米諸国との通商交易の必要なことを献策した またその開港場として横浜が最適地であることを強く主張し幕府の決意を促して 国際港都横浜の今日の発展の緒を作つた 不幸にも先生はその後京都に遊説中攘夷派刺客の兇刃のために木屋町三条で客死した 時に元治元年一八六四年七月十一日のことであつた 本年はたまたま開国百年の記念すべき年に当るのでわれわれ有志相はかりその功績をたたえるためにここに顕彰の碑を建て 永く後世に伝えることとした

象山は、開港「当時の新思想家」「熱心な開国論者」であり、彼こそが「開港場として横浜が最適地であることを強く主張し〔中略〕国際港都横浜の今日の発展の緒を作つた」、いいかえると、横浜のようすを適切に把握し、そのゆくすえを見抜いた慧眼のひとだと、市長による碑文で象山が讃えられている。かつて、港町横浜への入り口だった野毛坂のうえにある野毛山公園は、開港の先覚者を顕彰する碑を建てるのにふさわしい場所といえる。そことくらべると、井伊直弼の銅像が立つ掃部山は横浜の場末となる。かつての開港場横浜にむかって、象山顕彰碑は直弼銅像よりもちかづいた。これまで横浜では、開港実現の功績を顕彰する記念碑は、ただ1つ直弼銅像のみだったところに、この開国百年の記念すべき年に 開国論者を讃える象山顕彰碑がくわつたのである。ただしそれは、直弼銅像のような肖像彫刻ではなく、開国論者というにふさわしく横浜開港を推進した象山を推奨する文字が彫られた碑だった。

象山の歴史はどのように記され、没後に彼はどのように想起されたのだろうか。吉川弘文館が発行する人物叢書のなかの1冊『佐久間象山』(大平喜間多執筆、1959年)は、象山が「三条上ル木屋通りに差しかかったのは午後五時頃〔中略〕身に十三カ所の疵を負うて倒れた」ことや、「象山の横死を遂げるや、松代藩においては禍いの自藩に及ぶことを恐れ、佐久間は後ろ疵を受けて死んだのであるから武士にあるまじき醜態であると称し、七月十四日知行・屋敷地を共に召上げ、一子恪二郎には蟄居を命じた」ことを記し、「何れにしても開国の先覚者でしかも熱烈な愛国者である象山に、国賊の汚名を着せて殺害して

しまったのは、返すがえすも遺憾の極みである」との感慨をもって記述を終えている。ここにいう「国賊の汚名」とは、同書が引用する、象山殺害の7月11日に京都三条大橋に貼られた紙のなかの表現をふまえている。「皇国忠義士」による象山誅罰を宣告するその貼り紙は、「大逆無道天地に容れ可らざる国賊」に「天誅を加へ」と告げていたという。象山は「西洋学を唱ひ、交易開港の説を主張し、〔中略〕御国是を誤候罪捨置難」いうえに、さらに、「奸賊会津・彦根二藩に与同し、〔中略〕恐多くも九重御動座彦根城へ移し奉候儀を企てたからだ、彼の罪があげたてられたのだった²³⁾。象山を誅殺したものからすれば、彼の交易開港の説と、くわえて天皇を彦根城へ移す計画が国賊というに値する罪となる。象山と彦根藩とは同罪ということだ。

大平が執筆した『佐久間象山』は、「大正十三年生誕地のほとり」に象山神社が県社として建立された、と記して終る。国賊と貶められて殺害された象山も、彼を祀る神社が建てられれば、その復権もまっとうされたとみなされるだろう。そしてこの書は巻末の略年譜で、いくつもの象山をめぐる建碑の歴史を報せている。それらを列挙すると、「長野県高井郡佐野村に象山佐久間先生遺沢碑建つ」(1879年)、「門人等相謀り東京都下飛鳥山に桜賦の碑を建つ」(1884年)、「義弟〔中略〕東京角筈富士見台に望岳賦の碑を建つ」(1890年)、「象山々頂に贈正四位佐久間象山先生碑建つ」(1902年)、「生誕地に碑建つ」(1913年)、「遭難の地京都に記念碑建つ」(1915年)、「松代町蓮乗寺に象山並びに男格の墓建つ」(1922年)、「松代町に県社象山神社の造営成り鎮座祭を行う」(1938年)、そしてこの略年譜での最後がさきに碑文をみた、「横浜開港の恩人として横浜野毛山に彰徳碑建つ」(1954年)、となる²⁴⁾。

23) 大平喜間多は三条大橋に貼られた榜書にみえる「唱ひ」は「唱へ」と書くべきものを誤ったもので、松代地方人にはよくその誤りを犯す癖があり、また筆跡から象山と不仲の家老一派が暗殺したのではないかという説があると紹介した。この「唱ひ」をめぐる記述は、あたらしいところでは、井出孫六『杏花爛漫 - 小説佐久間象山』(上下、朝日新聞社、1983年)、また溯れば、象山先生遺跡表彰会編『佐久間象山』(実業之日本社、1916年)でも用いられていた。後者には「遭難の日、三条大橋の袂にこんな捨札があつた。「唱ひ」の仮名遣の誤つてゐるのに注意して見よ。下手人の徒党の中には斯様に仮名遣を間違へるものもあつたのだ」とだけ記されていた。

象山終焉の地ちかくに建てられた碑の写真や情報は、前掲の『偉人の倂』に収録されている(本稿Ⅲを参照)。所在地は京都市表瓦町京都ホテル裏広瀬邸内、建設年月は1915年11月、原型作者は武石浩三郎、構造は高さ1尺7寸、建設者は象山先生遺跡表彰会。この会は象山の伝記である『佐久間象山』を、3度にわたって刊行している(1916年実業之日本社刊、1920年再版明治図書刊、1930年増訂地理歴史研究会刊)。碑の銘記は、

嘉永以後外船叩開國論沸騰拳主鎖攘當是時佐久間象山先生以絶特之識独排群議而倡開國竟
 以此取禍実元治元年七月十一日也後五十余年有志胥謀立石以表其終焉之地距此正東五十二
 尺乃先生遭難処 / 大正四年十一月 / 象山先生遺跡表彰会建之

となっている²⁵⁾。象山の表彰されるべき事績は、「倡開國」とあらわされている。「開國」を倡えた象山が、まさにそのことによってのちに誅戮と表彰とに引き裂かれるのだ。表彰のほうがあととなったがために、象山の肖像彫刻にむかって像主の表彰をおこない、また表彰されるにふさわしい人物と判定されたその証として、象山像が仰ぎみられてゆくのである。ただし、京都のこの碑は、象山の肖像彫刻といっても、浅い彫りのレリーフにすぎず、全身像ではなかった。

さて、『偉人の倂』のなかにあらわされた象山をたずねてみよう。そこではまず、「若し信州人士の血管に、颯々たる一片の士気が高鳴つてゐるものありとすれば、夫は佐久間象山修理の感化でなければならぬ」と、讃えられるべき信州人氣質(意気昂揚といった気性)があるのならば、それは象山の影響によって生じた変化だとみせる。「博覧強記」の青年期、藩命にもしたがわれない「至孝の誉」、旺盛な「真理探究」、「海防八策」の建白と砲術の受講、勝海舟や吉田松陰との交流が示されて、しかし、松陰の国禁違反に連座して禁錮、幽閉と

24) この大平による『佐久間象山』は象山神社建立を「大正13年」、横浜野毛山の建碑を「1956年」とするなど誤記が多い。それぞれ、昭和13年、1954年が正しい。さらに正確には、横浜の象山碑は彰徳碑ではなく顕彰碑、象山は恩人ではなく先覚者とされていた。

25) この「象山先生遭難之碑」の碑文は『京都日出新聞』(1915年11月1日)の記事を典拠としたその全文をウェブサイト「京都市歴史資料館情報提供システム/フィールド・ミュージアム京都」でもみられる(http://www.city.kyoto.jp/somu/rekishi/fm/ishibumi/theme_list_05_frame.html。2008年5月26日時点)。

なつたと書かれる。そして、「元治元年七月十一日、京都で攘夷党の刺客の為に斃れた。年五十四歳」との記述で象山の項は閉じられた。

『偉人の倂』が刊行された1920年代よりまえに溯ると、1913年には象山没後50年をむかえるにあたり、象山を祀る神社創建が企図された（このとき京都に前出の象山先生遺跡表彰会ができる。ただし、実際に県社として象山神社がつくられたのは1938年のこととなるが）。さらに溯ると、1888年11月には、象山の「生前ノ妆容ヲ写シテ紀念銅像ヲ鑄造シ、之レヲ東京府下ノ一勝地ニ安置」することと、「碑文ヲ横浜伊勢山ニ樹立セン」ことが計画された²⁶⁾。そこでは、象山はどのように顕彰されようとしたのか。

慶応ノ末年ヨリ明治ノ初年ニ比ビ、殉難ノ士蓋シ渺ナカラス、其血液ハ皆今日ノ開明世界ヲ構成セル資料ナリ、而シテ其識見ト學術トヲ以テ特ニ勝サレル者ハ、我カ象山先生ニ非スシテ誰ソヤ

と、ここでも象山はその開明性と殉難の組みあわせにおいて讃えられるのだし、また、「既ニシテ幕府互市ヲ許シ、下田港ヲ開ントス、先生曰ク彼地天険ヲ擁シ策応ニ便ナラス、苟モ彼我ノ便ヲ謀ラハ横浜港ヲ開クニ若カス」と説いたことにより、横浜に象山の事績を記した碑が建てられようとしたのである。建碑場所に選ばれた横浜の伊勢山は、横浜の総鎮守として天照大神が祀られた皇大神宮がある聖域でもあった。この計画の呼びかけ人であり、『佐久間象山紀念銅像建設之趣意書』の編集兼発行人である、東京の牛込区に寄留する市川興太郎は、「茨城県士族」とその書の奥付に記していた。

象山の銅像建立計画が動き始め、その趣意書が刊行されたときは（奥付では1月25日出版）、憲法発布とそれによる特典について噂されたり報道されたりしたそのさなかだった²⁷⁾。憲法発布にさいして、象山は贈位の対象となり、直弼にはそうした特典はおよばなかった。なお、この建碑計画の推移は不明で

26) 市川興太郎編『佐久間象山紀念銅像建設之趣意書』（市川興太郎、1889年。MDL）。

27) たとえば『日出新聞』では1889年1月初旬には西郷隆盛をめぐる「賊名解除の噂」が報じられ、2月には一連の贈位報道に象山の名もあがり、3月になると「佐久間贈正四位伝」や「佐久間贈正四位肖像」が掲載された。なお詳細は不明ながら、象山の全身銅像は現在、長野市の八幡原史跡公園（川中島古戦場）にある。

あるが、実現すれば、東京府下に建てられた銅像としてはもっとも早い時期の1つとなったし、横浜における開港をめぐる記念碑の建立としても最初の建造物となったことだろう。しかしこの象山の顕彰は東京でも横浜でも実現せず、横浜での開港記念碑の建立は、直弼銅像が最初となった。

(2) 開港百年の井伊直弼

開国百年祭が開催された1954年の5年後に、横浜は開港百年の年をむかえることとなる。それを記念する祝賀イベントは、1年早い1958年におこなわれた。

この記念事業の1つとして、郵政省は「開港記念切手」を発売することとし、その図案が2月27日に発表された(写真つき。『神奈川新聞』1958年2月28日。以下K580228と略記する)。「横浜、函館、長崎三港の開港百年祭を記念」したその10円切手は「開港の功労者井伊掃部頭の銅像に開港条約調印船ポーハタン号と現代の港風景をあしらったもので、周囲には横浜市の紋章をはじめ函館、長崎の紋章を配し」た図柄となっている。開港の功労者はだれかと問われたとき、それはなにも直弼ひとりが選出されるのではない事態がこれまでもあらわれていた。しかし、実在の人物の肖像彫刻としての銅像となると、これは初代が開港五十年祭のとき、二代めが開国百年祭のときに建立された直弼像しかない。「開港」を記念する表現として、この切手では横浜の直弼銅像が選ばれ、その中央に配されたのだった。

この記念切手にはすぐに意見が寄せられた。横浜中郵便局長による「開港百年記念切手をみて」(K580301)では、「印面のどこにも横浜という文字はなく〔中略〕国際的な開港百年祭を盛大に行うとする横浜としては、ちょっと物足りない感がないでもない」、岸壁、船、クレーンを配した絵柄も「開港場に共通の事柄で、いずれも横浜だけの特徴でないといえはいえるだろう」、との不満がまずは述べられている。だが、「掃部頭の銅像が現実に横浜にあること、日本の開港横浜の誕生を決定づけた日米通商条約が、横浜沖ポーハタン号上で調印された史実、ならびにこの切手の発行日が横浜開港百年祭当日に予定されていることなどを考え合わせると〔中略〕実質的にはその〔日本開港百年の〕

中心的役割を果たした横浜開港百年の歩みを如実に表現しているように思われる」と局長はこの切手の図柄に、満悦のようすなのだった。

横浜沖で条約が調印されたとの「史実」も、開港百年記念切手の発行日も、それら自体は切手のなかに描かれていない。そうすると、複数ある幕末に開かれた港のなかで、横浜がそれを代表するのだという自負は、1つに直弼銅像によって支えられているのである。記念切手発売当日の『神奈川新聞』(580510)は、「意匠は横浜、長崎、函館三市の紋章で囲んだなかに井伊大老、黒船、現代の港風景を配した」切手の写真とともに、その発売を報道した。掃部山に直弼銅像があると知っているものは、この直弼銅像を描いたとみえる小さな図画を、長崎や函館ではなく、横浜開港記念の意匠と受けとめるだろう。

開港百年を祝う1958年の横浜では、直弼を始めとした開港功労者の顕彰がおこなわれた(「開港功労者を顕彰 / あすの記念式内外の故人・31氏」K580509)。直弼のほかに功労者としてならべられた人物とその功績をいくつかあげると、堀田正睦は「老中、外国掛として米国総領事ハリスと横浜開港の通商条約談判に当たった」、佐久間象山は「幕府の下田開港論に対して横浜開港を主張した」、岩瀬忠震は「老中堀田正睦の下で横浜開港を建議、開港条約起草の責任者」、また、ペリーは「神奈川条約締結にあたり横浜開港を主張」、ハリスは「開港をみちびいた外交官」、そして直弼は「横浜開港の責任者」と評されている。この横浜開港をめぐる顕彰においては、その談判をしたもの、主張したもの、建議したものがいるなかで、直弼は責任をもつものとなったのである。

開港百年祭初日に「横浜開港百年祭記念号」として発行された『神奈川新聞』(580510)紙上には、直弼銅像の写真が掲載され、それにつけられたキャプションは、「横浜開港の祖、井伊掃部頭の銅像。西区掃部山公園で、まゆをいからして港を見つめている。戦火を浴びたり、心ないドロボウにいためつけられたりしたが、こしは百年祭にそなえて公園を整備した」と銅像を紹介している。戦時下の1943年に金属回収の対象となり、銅として撤去されてしまった直弼銅像は、1944年に始まるというB29爆撃機による横浜空襲を体験してはいない。正確には直弼銅像は戦火を浴びていないのだが、ここにいう「心ないドロボウ

にいためつけられた」とは、かつて『神奈川新聞』が報道したとおり、開港百年祭開催の前年1957年に発生した、直弼銅像の冠と刀の一部分の「盗難」(K570303)を指している。再建からわずかな年月のあいだに、すでに直弼銅像は損傷を受けていた。さらに溯ると、1935年3月3日未明に、「銅像の首をもぎ取り斬奸状を添へて桜田門外に遺棄する計画」による直弼銅像襲撃未遂があった(『東京朝日新聞』350304)²⁸⁾。直弼はその死後に銅像となっても、攻撃対象となったのだった。

さて、横浜での開港百年祭式典には、1954年の開国百年祭のときは欠席だった彦根市長井伊直愛が出席した。それを伝える記事の見出しは「彦根市民の喜び/直弼公顕彰を喜ぶ井伊市長」となり、「平沼市長から表彰状をうける井伊さん」の写真も添えられている(K580511)。直愛の「感激」として記事が伝えるところは、

直弼公は開港の責任者だったのだが、以前は資料不足などでずいぶん誤解されていた点があった。直弼公は調印の五年前に開港論を幕府へ出しており外国事情にも通じていた先進的な開国論者だった。私の家にはまだ世に出ない一万点からの資料があり東大史料編さん所で研究している。横浜市は直弼公を早くから理解して、銅像を作っていたいたりしているのにさらにまた顕彰して下さった。このよるこびは私一人ではなく直弼公を出した全市民のよるこびとしたい。

との談話だった。5月18日に掃部山公園で開催された横浜開港功労者の感謝祭(およそ500名参列)を伝える記事(K580519)には、直弼銅像の写真も添えられている。直愛のいう「開港の責任者」という直弼の形容は、さきにも『神奈川新聞』記事の評定とおなじだ。この催しは、事前に示された「開港百年祭の行事一覧表」では、「井伊掃部頭その他物故功労者感謝祭」と記されていた(K580510)。横浜が感謝をささげる物故功労者の代表が、直弼だったのだ。他方で、国際仮装行列がおこなわれる5月11日の『神奈川新聞』紙面には、「小中学生のページ」として紹介された「横浜100年の歩み」では、「横浜開港の恩人ハリス」との見出しがみえていた。開港の恩人は、直弼でもありハリスでも

28) 縮刷版より引用。なおこれを3月4日未明の出来事とする報道もあった(前掲(脚注4)阿部安成「二代めの肖像と履歴」参照)。

あった。

直弼顕彰にとって、横浜開港百年とはどのような時点だったのだろうか。開港百年祭にさきだつ開国百年の記念事業として、直弼をめぐる歴史展示が東京と横浜の2か所でおこなわれた²⁹⁾。展示においては、「史料」を提示し、それをもとに「史実」を確定し、それらをふまえて直弼を論議することが要諦となっていた。こうした直弼顕彰のもっとも基礎となる史料をめぐるのは、前述のとおり1949年に井伊家文書の整理が始まったとの報道があり（本稿Ⅰ）、それから10年経ったところで「大日本維新史料 類纂之部 井伊家史料」（東京大学史料編纂所編、1959年）の刊行が東京大学出版会から始まり、それからしばらくして、東京大学史料編纂所助教授の吉田常吉による『井伊直弼』（吉川弘文館、1963年）の刊行となる³⁰⁾。さきに見た『神奈川新聞』紙上の直愛談話は、まさに井伊家文書を「東大史料編さん所で研究している」そのさなかに発信された現状報告だった。また談話にいう直弼が幕府に提出した開港論とは、開国百年の井伊大老展にも展示され、さらに溯れば島田三郎の『開国始末』（1888年）でも参照され、また現在の直弼研究においてもかならず言及される史料となっている。

1858年開港百年のときには、1954年開国百年のときとちがって、直弼を主題とした大規模な展示はおこなわれなかった³¹⁾。開国百年を記念した事業として、横浜には直弼銅像と象山顕彰碑が建てられ、横浜での「開国百年記念歴史展」では4つの展示コーナーのうちの2つが「井伊直弼」「佐久間象山」となったように、「開国」をめぐる人物の顕彰をおこなうにあたっては、その選定に均衡を持ち込もうとする観があった。そうした事態を経た横浜での開港百年の

29) 開国百年祭と直弼顕彰については前掲阿部安成「二代めの肖像と履歴」を参照。

30) 吉川弘文館人物叢書の番号でいうと直弼は113で、1959年刊行の象山は23だった。

31) 直弼生誕の地彦根では『朝日新聞』滋賀版によるかぎり、1954年には「井伊大老座像発見」（8月24日）の記事が、1958年は彦根史談会による直弼を「開国の偉人」と讃える図書である『井伊直弼』の刊行（5月5日）、直弼銅像の護国神社境内から金亀公園への移転（6月26日）の報道にくわえて、「にぎわう彦根の開港百年記念展」（11月3日）の記事がその動向を伝えていた。その記念展は11月1日から3日間、中央公園内産業会館で、狩野永岳筆直弼座像、130年まえの「世界人種風俗図」、「横浜外国人遊行図」など「開港にまつわる珍らしいものが並んでいる」展示だったようだ。

記念事業では、開港功労者への表彰や感謝において、直弼がひとり抜きんできていたといえよう。

VI 横浜開港之首唱者³²⁾

(1) 岩瀬忠震の顕彰

1982年11月には、横浜にもう1つ、開港にかかわる顕彰碑が建立された。場所は、旧神奈川宿ちかくの本覚寺山門外。

「井伊大老の銅像が市内掃部山にあるのに、忠震の碑がないのはおかしい」という主張が、建碑の始まりとなった。ここにいう岩瀬忠震は、前述のとおり、横浜開港五十年を記念して建てられた開港記念横浜会館のホール・アーチにその紋所



を嵌め込まれた開港の尽瘁者であり、また、横浜開港百年記念として表彰された「開港功労者」のひとり(開港条約起草の責任者)である。この碑の表には、文字は「横浜開港之首唱者 / 岩瀬肥後守忠震顕彰碑 / 横浜市長細郷道一書」とのみ刻まれ、ほかには忠震の肖像がレリーフとなって彫られている。裏面の碑文は、つぎのとおりである。

岩瀬忠震は 旗本設楽貞丈の三男で 文政元年(一八一八年)十一月二十一日に生まれのち 旗本岩瀬市兵衛忠正の養嗣子となる 林家八世林衝述育の外孫である / 天保十四年(一八四三年)昌平校学試を経て 閻老阿部正弘に抜擢され 部屋住みながら 先ず御徒頭に 次いで御目付に任ぜられた 当時開国を要求する諸外国使節の来航相次ぎ 長崎に 下田に 江戸と幕府は交渉を重ねた / 岩瀬忠震は 海防掛目付のなかでも特に開国論の中心的存在として活躍した / アメリカ総領事ハリスに対し 日本側全権委員の下田奉行井上清直と共に 日米修好通商条約を審議し ハリスの要求した大坂をはじめ 開港希望地の総てを斥け徳川幕府百年の大計のために「武州横浜」の開港を首唱した唯一の幕臣が岩瀬忠震であった / 安政六年(一八五九年)六月二日横浜は開港して今日の基を拓いた 日

32) 本稿脱稿後に(とりわけこの章の)補論として「これは岩瀬忠震の伝記ではない。 - 伝記あるいは評伝という歴史記述への問い」(滋賀大学経済学部 Working Paper Series No.100, 2008年5月)を書き、すでに公刊した。

本駐割公使に昇任したハリスの希望で 本覚寺が 初代アメリカ領事館となり 神奈川駐在アメリカ領事イー・エム・ドールが 境内の松の木の枝を切り払ってその幹に星条旗をかかげた／横浜開港の前年安政五年（一八五八年）七月八日岩瀬忠震は四名の同僚と外国奉行に任命され 米国はじめ蘭・露・英・仏四か国との通商条約締結が完了すると 岩瀬忠震一人その年九月五日に 開職の作事奉行に左遷 翌六年八月二十六日大老井伊掃部頭直弼の安政の大獄により幕臣中最も罪科の重い 職禄剥奪 謹慎永蟄居を命ぜられた／岩瀬忠震は 江戸向島墨提の辺り 岐雲園と名付けた別野に 書画飛鷗を友として幽居したが 文久元年（一八六一年）七月十一日親愛の臣白野夏雲にみとられ四十四歳をもって病歿した／横浜開港の首唱者岩瀬忠震顕彰碑を建立するに 開港後百二十四年の今日となる その余りにも遷延したるに 腑して寛恕を乞う次第である／撰文 横浜郷土研究会有志／岩瀬レリーフ製作 慶寺丹長／書 堀愛泉／石工 野村忠男／昭和五十七壬戌年菊月 斎藤由蔵建之

この忠震をめぐるのは、顕彰碑建立より2年まえの1980年に、横歴双書第1巻として、『横浜開港の恩人 岩瀬忠震』という書物が、横浜市図書館内横浜歴史研究普及会から発行されていた。執筆は、横浜郷土研究会の森篤男による。本書冒頭の「発刊にあたって」は、「横浜が開港して、今年で百二十一年になります」と書き始められ、「この冊子の刊行も、横浜開港を祝う仕事の一つとして本会〔横浜歴史研究普及会〕が計画いたしました」と、横浜開港記念祝賀としての刊行なのだとあらわされている。本書は、1982年7月に再版の発行となり、そこにはあらたに、顕彰碑裏面の碑文が折り込みでくわえられた。さらに森ほか2名による『横浜開港之首唱者 岩瀬忠震』（〔横浜郷土研究会有志〕[1982年]）や、『爽快 岩瀬忠震顕彰碑建立記念誌』（岩瀬肥後守忠震顕彰会、1986年）にも、碑文全文が掲載されている。

碑自体だけでなく出版物をとおしてひろく知らされようとした碑文で、忠震はどのようにあらわされたのだろうか。そこでは、「ハリスの要求した大坂をはじめ 開港希望地の総てを斥け徳川幕府百年の大計のために「武州横浜」の開港を首唱した唯一の幕臣が岩瀬忠震であった」と、ひとり彼だけに帰せられるその功績を讃える一方で、しかし「大老井伊掃部頭直弼の安政の大獄により幕臣中最も罪科の重い 職禄剥奪 謹慎永蟄居を命ぜられた」と、開港の功勞

者を処罰した直弼を弾劾し、「横浜開港の首唱者岩瀬忠震顕彰碑を建立するに開港後百二十四年の今日となる。その余りにも遷延したるに俯して寛如を乞う」と、横浜の開港をだれがさきに主張したのかをめぐる忠震の優位性と唯一性、その忠震をのちに処罰した直弼の悪政、忠震顕彰の遅れへの謝罪が、ここには展開している。1980年代初頭の横浜では、忠震を顕彰する書籍の発行、顕彰碑の建立、書籍の再版と集中して、忠震顕彰がおこなわれたのだった。

『横浜開港の恩人 岩瀬忠震』を著した森の「はじめに」によると、彼が本書を執筆するきっかけは、1973年の夏に横浜市教育委員会と横浜郷土研究会が共催した「横浜の歴史講座」で講師をつとめたことにあったようだ。そこで森は、

岩瀬忠震が、開港地は横浜でなければならぬという主張をして、押し切った結果、今日の横浜があるが、その岩瀬に対しては、横浜市では恩人らしい扱いは何一つしていないが、安政の大獄である残酷な殺戮を行った大老井伊を、旧彦根藩士が銅像を掃部山に建立したために、開港の恩人として横浜市が建立したものと市民は錯覚されているのは大きな誤りであると講演した。

これを受けて受講生のひとりが、忠震の碑を建てようと市長などにはたらきかけたという。この「はじめに」は、「岩瀬忠震の顕彰の碑を建立したいことを切望する」と終っている³³⁾。

第1部「横浜開港の恩人岩瀬忠震」と第2部「横浜開港をめぐる人々」³⁴⁾に分けられた同書で森は、阿部正弘に抜擢された忠震が「幕末有司第一人者の開国論者となり、指導者となった」ようすを描き、「新二武州横浜江御開港」するよう堀田正睦に建言したことを記し、「勅許を得ぬうちとはと、引延しのみを考慮」する井伊と、「大老井伊の鎖攘論に悩」む「開国主義者」の忠震とを対比している。そして、11の章に区分された第1部のなかで森は、「日本の開港の恩人は銅像が定めるものか」との章題を掲げた。そこでは、掃部山に立つ直

33) この「はじめに」は忠震顕彰碑建立除幕式の開催日と同じ日に刊行されたとおもわれる前掲『横浜開港の首唱者 岩瀬忠震』収載の森篤男「『岩瀬忠震』執筆の動機」にも収録されている。

34) 第2部には阿部正弘、堀田正睦、直弼、忠震に始まり、ペリー、ハリスとつづく44名の人物が取りあげられている(象山はいない)。この第2部は再版ではなくなる。

弼銅像を取りあげ(写真つき)、直弼銅像台座碑文、小西四郎『開国と攘夷』(日本の歴史第19巻、中央公論社、1974年)、横浜商業会議所編『横浜開港五十年史』(1909年)、島田三郎『開国始末』(続日本史籍協会叢書、東京大学出版会、1978年復刻)所収の吉田常吉「解題」、『東京日日新聞』(1909年6月27日)、石井孝『港都横浜の誕生』(有隣堂、1976年)、福地源一郎『幕末政治家』(民友社、1898年)などを参照したうえで、「横浜市の高台に建立した井伊直弼の銅像は、直弼を開国に結びつけて建立の地を求めた旧彦根藩士の考えと、それに同調した市会の無定見の一部の人々によったもので、横浜市民の関知せぬことであった」と述べ、

横浜市民は従来は、誤った一般であり、誤った世人であったかも知れないが、銅像が丘の上に建っているから開港の恩人なのであるなどと思うことなく、開港して一二年、正しい横浜開港の歴史に眼を見開き、横浜開港のために外交応接の第一線に在って、条約の逐条を実施し、目付、外国奉行を頂点に〔中略〕四十四才の壮年というのに憤死した生涯の部屋住男岩瀬肥後守忠震、この人こそ横浜開港の恩人といえる人であるが、丘の上に銅像も建っていない。碑も建っていない。

との義憤を唱えたのだ³⁵⁾。森はまた、これよりもまえの章で、象山顕彰碑の碑文全文を引用し、それを『横浜市史』に照らしたうえで、「銘文のなかに開港地は横浜が最適地であるとしてあるが何にが故に最適地であるのか、全然具体的にも、抽象的にも、その事由がない、開国百年であるから、それを記念して建立しなければならぬ必然性を持たぬ碑のように感じられる」とその碑の意義を疑問視していた。開港をめぐる顕彰において、銅像を建ててそれが表明されたのは依然として直弼銅像ただ1つだった。「日本の開港の恩人は銅像が定めるものか」という題の章を立ててまで批判の対象と定めたのは直弼の顕彰碑としての銅像だったのだが、「横浜開港の先覚者」と賞讃された象山の碑

35) 森の論難の矛先は「大学教授の二説」という小西と石井にむけられているのだが、森も引用するように小西は「わたくしは井伊直弼を、開国の恩人と称することには組みしない。〔中略〕かれを開国の恩人と評価することは、どうみても適当ではない」と、石井は「はたして井伊直弼は開港の恩人というに値する人物なのであろうか」と問うたうえで「横浜開港の提唱者としての岩瀬」「幕府の開国政策の真の推進力であった岩瀬」「幕府の実権を握っていたのは、井伊をはじめ開国の大勢に背を向ける人びと」と記している。このように森の議論は筋がとっていない。

もまた森を憤慨させたのだった。

さきに記したとおり横浜郷土研究会の森(副会長)が執筆した本書は、横浜市図書館内の横浜歴史普及研究会が発行した書籍だった。彦根や茨城でもそうであるように、いくつかの地域で公立図書館内に郷土の歴史書を編む団体が事務所を設けて活動をするところがある。そこからの刊行物の内容は、あるていど行政の公認と受けとめられるだろう。本書「はじめに」に記されたところでは、「市長にお逢いした結果、市が旧英国領事館の地を買収したらその構内に、気のきいた形の碑を建てて下さいということで合意ができた」という³⁶⁾。

石井孝『幕末悲運の人びと』(有隣堂, 1979年), 前掲森『横浜開港の恩人 岩瀬忠震』(1980年), そして松岡英夫『岩瀬忠震』(中央公論社, 1981年)を読んで、「著者のいずれもが岩瀬の政治家としてまた個人として短い生涯の不遇と悲運について深い愛惜の心を有する」と感じ取った宮川則雄「岩瀬忠震のいる風景」を収録した前掲『横浜開港之首唱者 岩瀬忠震』(1982年)には、2つの新聞記事が転載されている。「横浜開港“本当の恩人” たたえて / 「岩瀬忠震」の碑建立へ」(『読売新聞』821015)と「岩瀬忠臣の顕彰碑建立 / 開港を強く進言」(『朝日新聞』821027)である。前者では、森が「顕彰碑を建てる」ものとして、また、碑文にみえる斎藤由蔵(記事では「由雄」)は横浜郷土研究会会員で建碑費の出資者と紹介されている。記事は、「森さんによると、旧彦根藩士が明治になって、日米修好通商条約締結の時、大老だった井伊直弼の銅像を掃部山(同市西区)に建立し、以来公園になって市民に長く親しまれていたため、井伊大老を開港の恩人と錯覚している市民が多いという」が、しかし「井伊大老は条約締結自体に消極的で「横浜開港」など念頭になかった。その大老に条約締結を迫り、横浜開港を実現させたのが岩瀬だったと言う」と報じている。その根拠となる史料が岩瀬から堀田に宛てられた書簡(安政4年11月6日。東京大学史料編纂所蔵)と示されている³⁷⁾。

36) この記述の真偽を判定したりその後の展開を明らかにしたりする用意がいまはないが、この建碑候補地となった旧領事館まえには1954年に開国百年記念事業の1つとして「日米和親条約締結記念碑」が建てられた。

忠震顕彰を担った森の談話は、「私たちは井伊大老の銅像を降ろせなどとは言わない。横浜開港から百二十三年を過ぎたのに真の恩人を埋もれさせておくのはしのびない」(前掲『読売新聞』)、「横浜開港を言い出したのは、忠震で、やはり開港の恩人。井伊大老の銅像が市内掃部山にあるのに、忠震の碑がないのはおかしい」(前掲『朝日新聞』)と、斎藤のそれは、「うちは、天保年間から続いた家だし、忠震のことを市民の人が知ってくれば……」(同前)と紙面に掲載されている。「計画から10年目 / 郷土史家らの念願実る」(見出し)出来事をとおして、「この建立には、「横浜開港の恩人は、従来言われてきた時の大老、井伊直弼(なおすけ)より、むしろ岩瀬忠震」との考えが込められて居り、国際港に発展したミナト横浜の誕生をめぐり、新たな“開港恩人論争”の火種にもなりそうだ」と記事はまとめられている。1980年代初頭の横浜では、著述と建碑とによって、開港の功労者としての直弼の評価と、そのあらわれとなる銅像の存在に異議申し立てがおこなわれたのだ。

(2) 郷土の偉人岩瀬忠震

開港から130年を経ようとする1980年代の初頭の横浜には、開港にかかわる人物の記念碑として、直弼銅像、象山顕彰碑、忠震顕彰碑の3つがあった。彼らはどのように知られる人物なのだろうか。

知名度でいえば、忠震は直弼や象山にくらべれば低くなる。たとえば、1995年に発行された全国歴史教育研究協議会編『日本史[Ⓐ]用語集』『日本史[Ⓑ]用語集』(ともに山川出版社)により、この三者が教科書で取り上げられる頻度を見よう。日本史Aでは、直弼4回、象山0回、忠震0回、日本史Bでは、直弼19回、象山9回、忠震7回、と高校日本史の教科書のなかでの記述頻度は、直弼が他のふたりを圧倒している³⁸⁾。すでに横浜には三者をそれぞれに顕彰する形像があるときだったにもかかわらず、このときの日本史A教科書で歴

37) これは横浜開港の先覚者として忠震が取り上げられるときにならずといつてよいほどに参照されてきた文書で、東京帝国大学編『大日本古文書 幕末外国関係文書之十八』(東京帝国大学文学部史料編纂掛、1925年)の史料番号89に老中宛上申書として収録されている。

38) さきに直弼と象山をめぐって参照した吉川弘文館人物叢書に忠震はあがっていない。また東京の雑司が谷霊園にある忠震の墓について、東京都教育委員会による知名人墓地案内

史を学習する高校生は、幕末の横浜開港をめぐっては直弼だけを知ることとなるだろう。

しかし、忠震の伝記や彼を取りあげた人物評伝などは、1960年代以降にカギってみても、わりと多く刊行されている。すでに記したものもふくめて以下に列挙しよう。

愛知県小中学校長会編『新 郷土に輝く人々』下巻、愛知県教育振興会、名古屋、1961年、所収、「開国のさきがけ…… 岩瀬忠震」³⁹⁾

愛知県小中学校長会編『開国の灯』郷土に輝く人々5、愛知県教育振興会、名古屋、1970年、所収、「開国の灯…… 岩瀬忠震」

石井孝『幕末非運の人びと』有隣堂、横浜、1979年、所収、「挫折した開国政策の推進者 岩瀬忠震」

森篤男『横浜開港の恩人 岩瀬忠震』横歴双書第1巻、横浜歴史研究普及会、横浜、1980年、1982年再版

松岡英夫『岩瀬忠震 日本を開国させた外交家』中央公論社、東京、1981年
愛知県小中学校長会編『ひげのとのさま』愛知に輝く人々3、愛知県教育振興会、名古屋、1982年、所収、「開国のともしび 岩瀬忠震」

『横浜開港之首唱者 岩瀬忠震』[横浜郷土研究会有志][横浜][1982年]

滝川一美ほか編『爽快 岩瀬忠震顕彰碑建立記念誌』岩瀬肥後守忠震顕彰会、新城、1986年

岸上耿久『光芒遥かなり 小説 岩瀬忠震』忠震会、新城、1998年

設楽原歴史資料館資料研究委員会編『岩瀬忠震』設楽原歴史資料館資料集第2集、新城市教育委員会、新城、[発行年不詳、1996年以降発行か]⁴⁰⁾

森健次『暁星 - 開国の扉を開けた幕吏・岩瀬忠震』文芸社、東京、2001年

、 図にそれがあがっていないという(前掲松岡英夫『岩瀬忠震』)。

39) このシリーズの最初となる愛知県小中学校長会編『郷土にかがやく人々』全3巻(愛知県教育振興会、上巻刊行1957年)では、取りあげられた「四十六の物語」のなかに忠震は登場しなかった。

40) 本書にあがっている忠震百回忌に刊行された小野田孝『東郷ゆかりの岩瀬忠震公』(1960年)や1988年に創刊された忠震会会報『爽快』は所在不明で未見。小野田は東郷中学校校長をつとめ、前掲愛知県小中学校長会編『新 郷土に輝く人々』所収の「開国のさきがけ」

新城市設楽原歴史資料館編『設楽原ゆかりの外交官 開国の星 岩瀬忠震』新城市設楽原歴史資料館，新城，2004年

近年の忠震顕彰は、愛知県^{しんしろ}、新城市でおこなわれている。新城市のホームページの[観光・文化 INDEX]で忠震は、「設楽（新城市）の領主設楽市左衛門貞丈の三男として文政元（1818）年に出生」と紹介されている⁴¹⁾。1950年代以来30年にわたって、愛知県教育振興会が内容と版をかえて発行しつづけている郷土ゆかりの人物伝にも忠震が取りあげられてきたとおり、彼は、設楽、あるいは新城、さらには愛知にとっての郷土の偉人というところなのだろう。ところが、そうした書籍にあまり記載されていないのだが、忠震は江戸生まれだった。

それはともかくも、忠震は、「米蘭露英仏の五カ国条約調印に彼はただ一人参加」した、「設楽原ゆかりの外交官」であり、「この条約のお陰で日本は世界の列強から守られた」と評価しうるはたらきを遂げた「日本開国の星」にほかならない傑物といわれるのである（新城市長による巻頭言。前掲新城市設楽原歴史資料館編『設楽原ゆかりの外交官 開国の星 岩瀬忠震』所収）。新城市長が、「今回、新城ゆかりの開国のリーダー岩瀬忠震が残している殆どの作品をこの小冊子にまとめることができました」と勧めるこの図録には、外務省外交史料館所蔵の日米修好通商条約現本の写真が掲載されていて、そこにははっきりと岩瀬肥後守の署名がみえる⁴²⁾。忠震はまちがいなく、条約調印にかかわった人物なのだ。開港場のない新城で忠震は、「日本開国の星」あるいは「開国のリーダー」と称賛され、したがって、「幕末の外交家岩瀬忠震は、私たちの称えてやまない郷土の偉人であります」と宣言されるのである（滝川一美「岩

↘ …… 岩瀬忠震」の執筆者でもあった。

41) <http://www.city.shinsiro.aithi.jp/history.iwase.html>。2007年7月16日時点。現在では、同ホームページの[観光>公共施設>新城市設楽原歴史資料館>岩瀬忠震](http://www.city.shinsiro.lg.jp/index.cfm/8_3115_118_662.html)でみられる(2008年6月5日時点)。

42) この図録は2004年10月16日～12月12日開催の新城市設楽原歴史資料館特別企画展「日本開国の立役者 岩瀬忠震」展の展示図録であり、また常設展「岩瀬忠震」コーナーの資料だという。忠震の描いた絵画や書、忠震の落款など収載された本書は、それらと「開国」とのかかわりがわからない曖昧な構成になっている。

瀬忠震顕彰碑の除幕に当たって」前掲滝川一美ほか編『爽恢』所収)。

だが、忠震ゆかりの地においても、「この、日本開国の功労者岩瀬忠震が、彼の残した偉大な業績の割には、知名の人となっていないのを嘆く」声があがっていたのである。そこで248名からの寄附金をもとに新城市に忠震顕彰碑が建立され(醸金者のほとんどが市内在住者)、その除幕式が1986年4月20日におこなわれたのだった。神社本庁統理徳川宗敬題額の「純忠」の二字と、国学院大学名誉教授瀧川政次郎撰文の碑文には「開国論者の公」「日本の危機を救ふ」と刻まれている(同前)。顕彰碑建立記念誌である『爽恢』では、新城よりもさきに建てられた横浜の顕彰について、その碑文全文を掲載するとともに、「実にどっしりとしている。とりわけ、忠震のレリーフがすばらしい」との賛辞を寄せている(なおこの岩瀬肥後守忠震顕彰会は新城市立東郷中学校内におかれた)。

さきの忠震顕彰碑を建立した岩瀬肥後守忠震顕彰会は、1985年に「忠震ゆかりの人々、設楽原郷党諸氏」によって組織された。その後は、「忠震会」(1987年結成)の名で顕彰や研究の活動をつづけているという(前掲設楽原歴史資料館資料研究委員会編『岩瀬忠震』)。1996年には新城市設楽原歴史資料館に開設された忠震コーナー常設展示に「協力」しているし、1998年刊行の前掲岸上耿久『光芒遥かなり 小説 岩瀬忠震』の発行者である忠震会は、その事務局が新城市設楽原歴史資料館内におかれていた。この会発足まえに溯ると、設楽原では、忠震百回忌にあたる1960年に前出の『東郷ゆかりの岩瀬忠震公』を刊行し、さらに古くは1909年に忠震50年忌追悼記念書画会が開かれていた(忠震は1861年没)。条約調印を遂行しながら、しかしいわゆる安政の大獄により永蟄居の処罰を受けた忠震なればこそ、くりかえされる顕彰が必要だったのだ⁴³⁾。

43) 前掲設楽原歴史資料館資料研究委員会編『岩瀬忠震』所収の「岩瀬忠震略年譜」には1863年「罪を許される」、1915年「生存中の功績が認められ、正五位を贈られる」とみえる。忠震を論じた学術論文で発行時期のはいそれとして松木順「岩瀬忠震の開国交易思想」(『経済論叢』第54巻第3号、京都帝国大学経済学会、1942年3月)がある。この論文は前掲岸上耿久『光芒遥かなり』に発行者と発行年月以外の書誌情報が記されていた。松木の論点の1つは「阿部正弘、堀田正睦、或は井伊直弼の下にあつて外交の枢機に参加し得た忠震は、単に開国交易思想を抱くに止まらずして、或る程度自己の抱懐せる思想を實際に」

おそらく忠震コーナーが開設されたそのすぐあとに、設楽原歴史資料館が資料集として刊行した『岩瀬忠震』は、「忠震のスケッチ」「設楽家の歴史」「忠震の生涯」「忠震の顕彰」の4部に分かれたり、冒頭のスケッチではすでに「開国の星」の形容がみえ、また「横浜開港の恩人」の賛辞が借用されている。資料集の体裁にみあうように、ここでは、島崎藤村の『夜明け前』や、福地源一郎『幕末政治家』と川崎紫山『幕末三俊』、幕末外国関係文書や『横浜市史』が参照されたり引用されたりして、さきの形容や賛辞を確かなものとみせている。「開国の星」のなかの「2. 日米修好100年と忠震」では、1960年発行の新城市郷土研究会機関誌『郷土』に掲載された滝川一美の「日米修好百年にあたり岩瀬忠震を偲ぶ」から、「幕末において、真に開国を決断した人は井伊大老ではなく郷土出身の外国奉行岩瀬忠震であった。この事について古くは福地源一郎（桜痴）は「世間は井伊大老を以て開国政治家の主導者の如く言うものもあるも、其の実を知らざるなり。当時幕吏中に於いて些かも鎖国攘夷の臭気を帯びざりしは岩瀬一人にて堀田閣老をして開国を断行せしめたり」とを引用して⁴⁴⁾、1990年代後半の時点から1960年に、さらに19世紀末にまで溯って、忠震の高評をたどっている。

(3) 維新と岩瀬忠震

設楽原歴史資料館が発行した資料集の『岩瀬忠震』にあがっていた、福地源一郎と川崎紫山の史論をみておこう。前者は1896年から『国民之友』に連載が始まり、1898年1月に民友社から刊行された『幕末政治家』であり、後者は1897年11月に春陽堂が出版した『幕末三俊』である⁴⁵⁾。同時期に刊行された両著で、三俊のひとりに、また幕末有司3名のひとりとして忠震が記述されている。

- 生かし得る立場にあつた」と忠震を幕末の「開国交易論者」と評価するところにあつた。
- 44) 前掲補論（脚注32）にも記したとおり、滝川は福地の『幕末政治家』を正確に引用していなかった。この箇所は原文では「堀田閣老をしてその所信を決断せしめたる」となっていた。この「所信」がなにかを厳密に言えば堀田がハリスに「参府」を許し、かつ「外交談判」にかかわったこととなる。
- 45) 『幕末政治家』は1900年6月民友社刊行版を定本とした岩波文庫版（佐々木潤之介校注、2003年）を、『幕末三俊』は阪南大学蔵書をもちいた。三俊はほかに矢部駿州定謙、川路敬斎聖謨、有司は水野筑後守忠徳と小栗上野介忠順で福地は彼らを「幕末の三傑」と呼んだ。なお『幕末三俊』は忠震会が1989年に翻刻している。

忠震が三俊にかぞえられた理由は、彼が「今を距ること、三十余年前、東方の変局に際し、開国主義を主張して、一時を風動したる、幕末の名士。一代の外交家」であり、「幕末の外交家として、比較的敏脳精識にして、手腕ありしものは、鷗処〔忠震〕の右に出づるものなかりき」と評しうるからとなる。対して直弼は、「経世家として、其眼識其手腕無かりき」「無識なる人物たると同時に、暴断的人物たりき」「井伊直弼に至ては、徹頭徹尾、鎖攘的思想に富める政治家にして、其条約調印は、勢の已むを得ざるに出でしのみなりき」と低い評価にすぎない(川崎は「伊井大老と鷗処」と題した節をおいている)。しかも、開国思想家に象山をふくめたとしても、「其思想を代表し、最とも活潑にして、最とも剛健なる、開国主義の主倡者たりしもの」と忠震が評価されるのである。これほどに高い評価を受けながら、忠震は、「多くの経綸を有したりと雖、多くの失敗者たりき」「天下に先ちて開国論を倡導せりと雖、世論の容るゝ所とは為らざりき」「進歩主義の代表者として、弊政の改革を主張したりと雖、守旧派の為に容れられざりき」といくどもくりかえし、逆接をもって語られてしまうその履歴ゆえに、没後に彼の俊が称えられたともいえよう。

『幕末政治家』で福地は、19世紀末からふりかえる幕末と現時とのあいだに、「すでに引証の書に乏しく、また参考の料を欠く。僅に記憶に存する所を記して以て民友社の諸友に示し窃に近史を論ずるの資に供するのみ」(自叙)と時間の隔たりを感じている。このとき、幕末をみれば、「徳川幕府の末路といえども、その執政諸有司中あえて全く人材なきにはあらざりき」(叙言)との観点から、政治家を論じたのである。記述は、阿部伊勢守に始まり、堀田備中守、そして直弼となり、彼については「井伊掃部頭直弼」「井伊掃部頭の決心 不時登城」「井伊掃部頭の専断」「井伊掃部頭 間部下総守上京」「井伊掃部頭 黜罰の専断」「井伊大老の外交」と多くの紙幅が割かれ、対して忠震は前出のとおり「幕末の有司」のひとりとなっている。

「米国条約の調印を行いたるは、ともかくも井伊内閣の英断なりといわざるべからず」と記したうえで、「当時真に開国の必要を認めたる卓見の識者は、薩摩斉彬卿・越前慶永卿・堀田備中守・岩瀬肥後守・永井玄蕃頭・橋本左内・

佐久間修理〔象山〕等の諸人に過ぎずして、その他は皆鎖国にてしばらく和すというの者流なりしのみ」と明記して、直弼については、「井伊を以て開国の卓識者なりと称賛して置かざるものも、またその真情を通曉せざるの評なるのみ」と厳しく書いている⁴⁶⁾。

そして忠震については、前出の設楽原歴史資料館資料集掲載の重引部分の前後をあらためて記すと、

非開国の群議の間に立ちて、断然世界の通義を主張し和親貿易の条約は欧米諸国の望に応じてこれを訂結せざるべからず、しからざれば日本は孤立して国運もついに危しと公言し、以て閣議を動かしたるは、岩瀬なり。世間あるいは井伊大老を以て開国政治家の主動者のごとくにいうものは、その実を知らざるの説なり。当時幕史中にて初よりして毫も鎖国攘夷の臭気を帯びざりしは岩瀬一人にして、堀田閣老をしてその所信を決断せしめたるも、岩瀬に外ならざりしこと事実を徴して明白なり。

とその主張と行動は高く評価されている。この「岩瀬肥後守」の節では、「勅許をまたずして日米条約に調印し、対外政策の基礎を定むること急務なりとは、当時外国掛の議にして、岩瀬は尤もその主張者なり」と条約調印そして開国へと時代を動かした政治家として忠震が書かれているが、横浜開港をめぐることはまったくふれられていない⁴⁷⁾。

さて、忠震顕彰碑は、どのような場所に建てられたのだろうか。建立場所の本覚寺は、かつて幕末にはアメリカ領事館として使われたことがあった。本覚寺参道の階段をのぼってすぐ目につくのが、「史跡 アメリカ領事館跡」の史跡標示である。その表には、「横浜市長平沼亮三書」、裏には、「昭和二十九年四月建 / 開国百年記念」と刻まれている。アメリカ領事館跡の史跡だというその場所柄が、忠震顕彰碑の建立地としてそこを選ばせたのだろう。しかしそこは、横浜市内とはいえ東海道旧神奈川宿のちかくであり、象山顕彰碑よりも、直弼

46) 福地は直弼の開国論を「たとい一旦条約に調印して国を開くとも、他日兵備充実せば外夷を斥けて国を鎖すにおいて何かあらんと信じ」ととらえていた。母利美和(『井伊直弼』幕末維新の個性6, 吉川弘文館, 2006年)による直弼開国論の議論はすでに19世紀末に登場していた。

47) 「岩瀬肥後守」をふくむ「幕末の有司」の章では、それまでの阿部伊勢守以降の章にはみられなかった「これは水野筑州の直話」「余が目撃せる所なり」といった典拠の示し方がもちいられている。

銅像よりも、さらに開港場横浜からは遠ざかってしまう場末なのだった。そして忠震の碑も象山のそれと同様に、当人を象った彫りの深い肖像彫刻ではなく、その顔が浮き彫りとなった平板にちかい肖像にすぎなかった⁴⁸⁾。しかも碑文が表面に記されている象山碑とちがって、忠震碑は碑文がその裏面に刻まれていた。横浜での建碑を主導した森の主張にみえる言葉づかいとくらべてみると、忠震の顕彰碑はひっそりと立っていたといえよう。

忠震顕彰碑の建立を伝えた前出の『読売新聞』は、建碑が「国際港に発展したミナト横浜の誕生をめぐり、新たな“開港恩人論争”の火種」となるか、と予測を示していたが、活発な論争へとは到らなかった。むしろここでは、「新たな」という形容に着目する必要がある。朝日新聞記者は、1954年の象山顕彰碑建立を想起していたり、1909年の直弼銅像にかかわる紛議を調べて知っていたりしたのだろうか。新たな論争というからには、過去の横浜での開港の恩人をめぐる論争が想定されていたのだろうか。忠震を歴史として、あるいは歴史のなかで論じようとするテキストが明らかにしたのは、幕末を回顧する19世紀末の時点では、開国の推進は直弼ではなく忠震が執行していたとみられていたこと、開港をめぐる功績や開港場の選定をめぐる議論はほとんどなかったこと、であった。

(つづく)

48) 忠震顕彰碑レリーフの肖像画（前掲新城市設楽原歴史資料館編『設楽原ゆかりの外交官 開国の星岩瀬忠震』の表紙にもカラー図版で似た肖像画が掲載）がだれのデザインかいまのところ不明1つの推測を示すと、渡辺修二郎『阿部正弘事蹟』上巻（渡辺修二郎、1910年。MDL）収載の土屋秀禾筆の「岩瀬忠震肖像」がこうした表紙にもちいられた肖像やレリーフの原画である可能性がある。なお近年、日英修好通商条約締結後に撮影された忠震が写っている写真が発見されたとの報道があった。写真は英国のビクトリア・アンド・アルバートミュージアム所蔵（『朝日新聞』980825朝刊）。この写真は横浜開港資料館の「ハリスと横浜」展（2008年4月23日～7月27日）に展示されている（同前080422朝刊。同紙の引用はいずれも database.asahi.com から）。